OB探訪

中大のエースから巨人ファン事業部へ

立場は変われど 全力投球

読売巨人軍　香坂英典氏

（写真提供＝東都大学野球連盟 同70年史より）

プロ野球読売巨人軍ファン事業部長の香坂英典氏（58）は、ファンが喜ぶ企画や社会貢献事業を推進中だ。中央大学時代はノーヒットノーランを達成した。ファンをいつもワクワクさせてくれる人である。

巨人のファン事業部

巨人の観客動員数は最近３年間、300万人超と大盛況。球場の収容人員は上限が決まっているため、満員以上の観客増は見込めない。一方でファンの求めるものはチームの常勝、選手の活躍、選手との触れ合いなど、たえず“もっと、もっと”と、こちらは上限がないようで、ファンサービスは大変な仕事である。

香坂部長率いる巨人のファン事業部には３本の柱がある。ファンサービス全般、ファンクラブ「G-ｐｏ」運営（会員約40万人）、社会貢献事業「G♥hands」。

来場者30人が試合後のヒーローインタビューを間近で見られる「アフターゲームグラウンドツアー」などがファンサービス。社会貢献事業とは、熊本地震被災地支援の募金活動や福祉施設児童らを巨人戦に招待する。同部署の業務は幅広く、それぞれに奥が深い。

「何をご提供したらファンの方々に喜んでいただけるか。さすがはジャイアンツと言っていただけるようにしないと」。ブランド力の再構築を目指して、思案の日々である。巨人は日本のプロ野球で最初の球団だ。1934（昭和９）年の設立以来、80年超の歴史と伝統がある。

在籍部員は２３人で、そのうちの10人が主催試合を東京ドームや2軍のジャイアンツ球場などで観戦する。「チーム状況、選手の動きなどを把握します」と香坂氏。「選手のその時のコンディションも含めて、負担がかからないように注意していますし、好調時にはそのパフォーマンスを３倍にも４倍にも光るようにしたいと思っています。ファン事業部は絶えず選手のそばにいて、信頼関係を築いています」

大学日本一の座に

中大時代は東都大学野球リーグ戦の神宮球場マウンドで躍動していた。そのころは外出先でも好きな音楽が楽しめる「ウォークマン」が大流行。

1979年・春季開幕戦の東洋大戦でリーグ史上21年ぶり８人目のノーヒットノーランを達成した。七回２死までは１人の走者も出さないパーフェクトピッチング。奪三振は毎回の15を数えた。

2月の巨人宮崎キャンプで、ファンサービスのイベントを見守る香坂氏
（写真提供＝読売巨人軍）

春季リーグで優勝。6月の全日本大学選手権では岡田彰布選手（元阪神監督）らスター選手を擁する早大を倒し、大学日本一の座に就いた。香坂投手は大一番で完投勝利を挙げた。

同期にヤクルト前監督の小川淳司氏、阪急（現オリックス）時代の1984年の新人王・熊野輝光氏。1980年、巨人の新人・香坂投手は「31」番のユニホームに袖を通した。偉大なる長嶋茂雄（背番号３）、王貞治（同１）両選手の背番号を併せ持ったスター候補生。同年７月には初出場、初登板を果たした。

ここまで山あり谷ありの連続だった。東都大学春季でリーグ優勝を遂げ、連覇を狙った秋季は最下位へ転落。２部降格は免れたもののつらい入れ替え戦を経験した。

山がどこで、谷がどこだったのか。埼玉・川越工高時代に受けた中大の特別セレクションは時季外れの「忘れもしません、10月14日でした」。８月の正規セレクション時は右手を骨折していた。９月の時点で中大新入部員はほぼ決まっていたという。

大先輩の配慮で受検が認められ、投球を受けた４年の福田功捕手（現楽天・星野仙一副会長補佐）が、宮井勝成監督に進言した。「このピッチャー、いいです！　すごく、いいです！」。その勢いに「見るだけだぞ」と後ろ向きだった宮井監督も、その実力にほれ込み、即決した。

入学後にもドラマがあった。香坂投手は理工学部土木学科。授業や実験に追われ、吉祥寺（当時）グラウンドから遠ざかる日が多かった。２年次のある日、久しぶりに練習に参加した。去る者は追わず、来る者は拒まず―が部の方針だ。

練習中のブルペンに、投球練習する投手がたまたまいなかった。「ブルペンが空いている、誰か投げろ！」「キミ投げろ」「えっ僕が？」

ほかの２年生２人とともに、ため

■自分の道を信じる

「中大生は粋ですよ」と香坂氏。全学共通と思われるのは、大学や個人に栄光や名誉があっても決して鼻にかけない。それでいて胸中にはふつふつと熱いものを秘めている。「ベタベタしない、飾り気のないところがいいですよね」。在学生に「自分の道を信じてやってほしい。それをやっている人が力をつけます。中大生には力があります」とエールを送ってくれた。中大応援歌「ああ中央の若き日に」の歌詞には、♪力 力 中央 中央―とある。

らいながら投げた。香坂投手が３球投げたところで、捕手が立ち上がった。「もう十分だ。このあと１カ所バッティングで投げろ」

声の主は４年の阿部東司捕手。のちに巨人･阿部慎之助選手の父になる。千葉･習志野高時代は３番･掛布雅之選手（現阪神２軍監督）、４番･阿部東司選手で甲子園大会に出場した。

１カ所バッティングとは打撃練習の一つ。突然のように現れた２年生右腕が主力打者を抑え込んだ。「休み肩といって軽いんです。ビュンビュン投げてしまいました」。テストは合格。世界のホームランキング、王貞治氏（現ソフトバンク会長）を育てた一人、宮井監督のお眼鏡にかなった。「あすから合宿に入れ。布団、持ってこい」

オープン戦を好成績で乗り切り、春季リーグ戦開幕第２戦。何人もの先輩投手より先に神宮のマウンドを任された。「人生が変わりましたね」。勝利を挙げると監督が言う。「あしたも投げろ」。第３戦も制して、勝ち点を挙げる立役者となる。

香坂氏が特別セレクションの日を振り返る。「福田さんが私の運を引き出してくれました。この話はつい最近、福田さんから聞きました。先輩たちに感謝です」。巨人入りする際には中大先輩で巨人元投手、当時スカウトだった伊藤芳明氏の情愛あふれる勧誘があった。「私を導いてくれました」。中大投手のノーヒットノーランは1941年の石原秀夫投手（対農大）、1954年の伊藤芳明投手（対農大）、1958年の若生照元投手（対農大）が達成。香坂投手は４人目だった。

エースとして中大を支えた。優勝パレードや神宮球場応援席で熱狂する学生や教職員を思い出し、「皆さんがすごく喜んでくれました。優勝っていいもんだなと実感しました」。八王子市内のパレードで同乗した教授とのやり取りが忘れられない。「冷静だね。キミはなぜ喜ばないの？」「次の大学選手権のことを考えています」

立場は変わっても気持ちは同じ。「勝たなききゃダメです。勝てばみなさんが喜んでくれます」

いまは巨人ファンのために全力投球する。ファンの喜ぶ顔が見たいから。

香坂氏の巨人軍職歴

投　手	初出場	1980
	初勝利	1983
	現役引退	1984
背番号	３１、49、40、87	

↓

打撃投手

↓

スコアラー（チーム付き、先乗り）

↓

広報部

↓

ファンサービス部

↓

編成調査室

↓

ファン事業部長

球団広報としても香坂氏は有名だった。長嶋茂雄監督の13年ぶりのカムバック、強打で夏の甲子園を沸かせた松井秀喜選手のドラフト１位入団。この1993年シーズンは２人の動向がプロ野球の最大関心事だった。

香坂氏はマスコミから殺到する取材依頼や番組出演交渉などに忙殺されながらも、２人のスターを見事に後方支援した。

同じ職場で働く中大卒業生、左から
堀田一郎氏、香坂氏、池田実奈氏